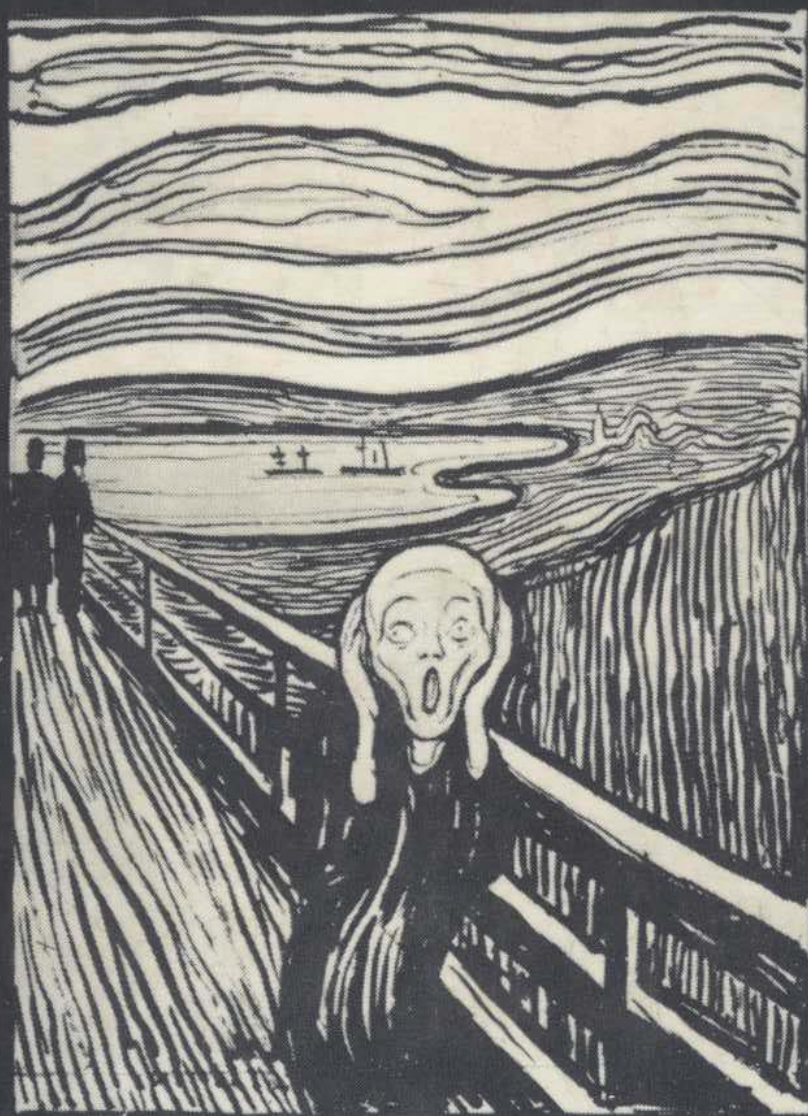


詞集 たいまつⅡ

むのたけじ



評論社

集
たいまつⅡ

むのたけじ

評論社

詞集 たいまつⅡ

昭和 51 年 5 月 20 日 初版発行 ￥ 590

著 者 む の た け じ

発行者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 有限会社友晃社製本

発行所 株式 評 論 社
 会社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-1₆

電話代表 (265) 1 9 6 1

振替東京 8-7 2 9 4

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取替えを致します。

(A-1)

まえがき

*これは、前著『詞集Ⅰ』を編みおえたあとの一九六七年夏から一九七五年冬までの一〇二か月間に私のくらしの中で凝ったことばのかずかずです。母胎は前著と同じように新聞『たいまつ』に連載の「炬火のことば」欄ですが、それに加えて他の刊行物に発表したもの、今度はじめて活字にするものをふくむ。

草稿を整理していて気付いたが、同じ思い、同じ願いをあれこれの角度から幾度もくり返している例があった。うっかりしていたのではなく、それだけそのことに執着しているせいだと自分では考えた。『Ⅰ』と『Ⅱ』と合わせて一一八六句となった断章の集積それ自体が、じつはたった一つの主題にせまる模索、そのためのくり返しであろう。

とはいえ無論『Ⅰ』との重複は避けました。そう配慮してもなお反覆している句がある。執着の深いせいだと受けとめてほしい。『Ⅰ』で述べたとちがう考えの句もある。

経験をかさねてきて考えがそのように変わったことだ。それが思考の転移にすぎないのか、著者においての退歩か、または前進か、それはあなたに裁いてもらいたい。

*いま新しい自著を世に送ろうとして産みの喜びをおぼえる。けれど喜びは小さい。そして折れている。聞くところによれば昨今わが国では平均して毎日約八五種類の書物が新しく発行され、年間の累計冊数は八億に近いという。でも社会状況はごらんの通りだ。印刷物がたくさん発行されたおかげで社会がそれだけ進歩している、とは見えません。社会問題の尻を印刷物にもっていくわけにはいかない。けれど、印刷物の相当量がずいぶん以前から、駅々の朝夕に見るように、しつらえられた箱への落とし紙に転じた。なぜだろう。活字を媒体とする表現活動とは一体なんだ。文章を書く行為、刷られたそれを買って読む行為は私たち日本人にとってなにを意味しているか。いや、いや、なにを意味しないできたか、そこを本気で問いつめなくてはならない、とかねてから思ってきたことがいま一段と胸にこみあげるのです。愚痴をこぼしているのではない。状況がそうであるからこそ、なにびとも捨てることのできないことば、血の流れている表現を求めてもがき続けなければならぬと自分で自分にいいきかせているのです。

本書の中の一句でも述べているが、歴史にはたらきかけたことばは、ほとんどみな短

かった。たいてい三秒以内で言える一五字以内だった。子どもにもわかって子どもでも言えるものでしたな。そうでなくては、混乱のうずの中で流れを方向づけ、暗黒のただ中で人々を励ます火のことばにはならなかったのだろう。そういう日本語、そういう道しるべをみんなで創造して共有したいと願うのです。そうするには、そうできる実生活を生きなくてはならない。ことばの卵子は事実であって、その精子となるものもまた事実であるから。

その「三秒以内」「一五字以内」の結晶を求めて、私も私なりに試行をかさねて進もう。錯誤ゆえの傷は恐れまい。この詞集に『Ⅰ』『Ⅱ』と番号を付けたのは『Ⅲ』を予期し、てのことです。自分の手持ち時間からして『Ⅳ』は望めないけれど、『Ⅲ』は産みたい。産めるように生きていきたい。

*この序文を書いている時刻は、大みそかの夜です。窓外は暗い。空気は澄んで凍っているらしい。まもなく蛇じやの崎橋さきのたもとにある寺から慣例の鐘の音が流れてくるだろう。ある人はむかし鐘の音に「生者必滅」を聞いたという。だが、現代史の暗中に光を見た先輩たちは、鐘の音はおろか風のさやぎにも路上の足音にも、必ず新しく生まれてくるものの鼓動を、決して絶えることのない出発の合図を、聞いたであらう。

しみじみ思うのですが、物ごととは常におわったところから始まっているのであるまいか。いや、始めなければならぬ。(一九七五年二月)

詞集たいまつ Ⅱ

目次

ひらく章	つくる章	そだつ章	すてる章	いどむ章	まえがき
167	121	85	51	7	1

い
ど
む
章

夜もまた太陽の半面である。夜が深くなるだけ朝へ近付いていく。

おのれを解放する者は外界の明暗に喜憂しない。むしろ暗黒を歓迎する。シェークスピア劇の一女性（ジュリエット）は、「日の神なんぞ駿馬にのせてさっさと西の空の宿につれていき、夜をすぐにつれてきておくれ」と祈る。愛に生きる者はくらやみの中でも自分の美しさに照らされてりっぱに愛の営みができるといって「夜よ、来て、早く来て」と叫ぶ。

なぜうつむくのか。うつむくなら地表の歴史をみつめよう。人類は若い。まだ、とても若いではないか。——地球はおよそ四五億歳だ。そこに原人類の登場したのは五〇万年むかしだ。そしてホモ・サピエンス（賢い人）と自称するわれわれ現代人の直接の先祖があらわれたのは、せいぜい四万年むかしだ。という具合に、人類が自分らの先祖を実証の方法でたしかめるようになったのは、ネアンデルタール人骨の発見（一八五六年）以来わずか一〇〇年そこそこだ。地表のあらゆる生きものの中で人類は、まだきわめて若い。残念なのは「きわめて賢い」とはまだいえないことだ。

国破れて山河あり。国栄えて山河なし。

私の一番の過失は、「国家」というものについての懷疑を青年期におろそかにしたことです。国民、国民というけれど、こちらで頼みもしないのに生まれたらすぐ国民にされていたのはなぜなのか、いったい「国家」とはなんだ、「くに」とはなんだ、それは人間生活にどうしても必要なものなのか、必要だとしたらなぜだ、不必要ならばどうするか、という疑問を小学生のうちにいだいて、せめて高校卒業のころまでに自分で自分に答えてこそ現代人といえるだろう。それを私はおこたった。それゆえのしっぺ返しは、あとになって一年ごとに痛くわが身に食い込んだ。こんな恥ずかしい怠けは、孫たちにやらせたくない。やってほしくない。

一九〇〇年（明治三十三年）二月一七日、足尾の鉍毒を糾弾して戦っていた田中正造は国会で政府を詰問し——「亡国に至るを知らざれば是れすなわち亡国」——と叫んだ。以来この一句は、この国の歴代政府と民衆われわれをもろともに糾弾し続けてきた、と思わぬか。

過去はすべて今日のための習作である。

映画の中で一人の人物がつぶやいた。「過去は泥棒だ。奪うだけで、なにも与えてくれない」と。彼は泥棒だった。

人はみな生まれさせられた。自分の父母をすら自分でえらぶことはできなかった。だから、なにごとのために死ぬか、つまり生きる目標を自分できめるところからへ私ゝがはじまる。

わが身を歴史に刻んで生きているか？ 時間に刻まれて生きているだけか？

中国共産党の結成は一九二一年七月だった。結党集会に参加した各地方代表は一二人だった。そのとき連絡のとれた共産主義者は中国全土にちらばる五七人だったという。そこから出発し、やがて数億の人民を解放して人民の政府を樹立した。その一九四九年一〇月に至るまでの時間量は二八年三か月だった。私たち日本人は「ヒロシマ」「ナガサキ」という座標から出発した。そして三〇年余、自分らが歴史のどこに位置しているか

もわからないでさまよっている。このへだたりは、なぜなのか？　なぜなのか？　なぜなのか？　なぜ……

「若い」と「新しい」とは別だ。年が少なければ人間がそれだけ新しいとは限らない。若いのに古い人たちを減らすには、老いても新しい者たちがふえなくてはならぬ。

パリの学生たちがドゴール政権に異議申し立ての行動を爆発させた一九六八年の、あの「五月革命」のとき、至るところの壁に刻まれた文字のなかに、「走れ！　同志よ、老人がきみのうしろにいる」という一句があったという。青年に「同志よ」と語りかけることのできる老人になりたい。「きみのうしろに老人がいる」と青年に言える老人になりたい。

反抗は青年の権利だって？　とんでもない。反抗は青年の義務だよ。義務としての反抗とはなんだ、そのことに目ざめないなら十分に青年ではないね。

だれでもとしをとれば「老」になる。必然で当然だ。でも「老後」とはなんだ。人のい

のちに付録あつかいできる部分があるか。あつてたまるか。医学者によれば、人は男女を問わず六〇歳ごろから一生のうちで最高の成熟期にはいるという。としたら、その姿は晩秋の一本の柿の木になぞらえることができよう。つい先ごろまでの茂りを払いすてて、残るのは数粒の実だけ。その実は次の生命のため精いっぱい成熟し、陶工の魂を吸いとったほどの美しさに輝いてゐるではないか。人もまた同様であろう。経験の長さ、深さにみちびかれて偽りの夾雑物きようざつをみな去って、次に続く世代のためひたすら真実の力を集中する、それが「老熟」というものだろう。これも医学者のおしえることだが、女の性のよろこびは月経の閉止したあとにむしろ充実し、自分にその気があれば六〇歳になろうが七〇歳になろうが性反応は女ざかりの当時に変わらないという。一方、男性のシンボルがどんな高齢になっても精子をつくり続けるのはなぜか。快楽への貪欲か。そのせいだけではあるまい。人類は産まなければ亡びる。だから、結び合う感動、結び合いたい欲求は人が人である限り死ぬまで変わらないことの証明だろう。だから遠いむかしに文字を考えた最初の人たちも、ヒトを「人」と象形したにちがいない。本能といって片付けるのでは余りに無責任な、このなまなましい能力につらぬかれた人の一生を「前」だの「後」だのと区別したり差別したりできる資格は、他人にも自分にもあろうはずはない。老いれば衰えるのは当然だ。自分からおいぼれるのは愚の骨頂だ。

一〇代の後半、その時期は生涯で最初の、そしてたぶん最も深い分水嶺である。その時期になにを学んだか学ばなかったか、なにを経験したか、しなかったか、そのちがいは生活が先へ進むにつれて身にしみるだろう。

七〇年も八〇年も生きたとて最後に石に刻まれるのは一つの日付だ。死なないうちに一つ一つの日付の重さを受けとめておこう。

日々これ絶筆。

ある晩ゆめをみた。——私は石になっていた。平べったくて小さな石だった。目はどこについているのかわからなかったが、目をあけていた。季節の色は見えなかった。夕刻だった。音がきこえた。人間の足音らしかった。やってきたのは、やはり人間だった。若いのか年とっているのか男か女か、それはわからなかった。その人間は手をさしのべた。私を撫でようとした。くすぐったくなるぞと予感して私は身をよじらせた。しかし感触はなにもおこらないで、手のおいだけが伝わってきた。いやなにおいだった。においの消えたあと、また静かになった。あたりは暗くなった。「きょうもだめらしいな」